

私の幼児教育論 VI

保育の基本(四)

神 沢 良 輔

三 保育の基本(四)

—— 幼児とのかかわり合いの中で ——

(vi) ひとりひとりの幼児は、いつも保育者と話し合っていると
思っていることを理解する

(1)

保育者は、「ひとりひとりの幼児のことばによる働きかけの中にある感情を受容する」ということの意義や重要性については、前回ののべたが、そのことは、保育者が全員の幼児を集めてその前で話しているときにも、同様のことがあてはまる場合が多い。つまり、そのような場面でも、ひとりひとりの幼児は、ひと

りひとりが保育者と話しあっているつもりであるのであり、また、そのように感じとっているのである。

幼児たちは、直接的には、保育者の「みんないらっしやい」などということばによって誘導されて集合してくるだろう。しかし、このようなことができるのは、ただ単に、保育者の発することばの内容によって刺激されて行動しているだけでは決してない。その根底には、登園してからこれまで、ひとり、またはグループで自分の興味を中心にした遊びをしたから、こんどは「学級全体で、保育者といっしょに遊びたい」という要求があるためであったり、また、毎日くり返されることによって、幼児に安定感をもたらしている「幼児の一日の生活リズム」などとも関係しているからであろう。

このようなことは、いまさらいうまでもなく、保育者として

は、きわめて自明のことであるともいえる。だから、このようなことを一応論外におくとしても、集まってきたひとりひとりの幼児たちは、そこにいる保育者の目を見つめているということだけは事実であろう。

それは、そこに保育者がいるからであり、その保育者のもっている、ひとりひとりの幼児との関係における、目に見えない心の絆があるからであろうし、ひとりひとりの幼児は、それを確認するという意味をも含めて、保育者の視線の中に含まれている、保育者との人間的な感情のつながりを求めて、保育者を見つめているのである。

(2)

私は、ある保育者から、こんな話を聞かされた。

「母の日」が近づいてきたので、一週間ほど前から、幼児とともに、「母の日」のプレゼント作りをしてきたが、それも一応の完成をみたので、その前日、そのプレゼントを学級全体の活動の中で、ひとりひとりの幼児にくばり、「母の日」について関心をもたせるとともに、「あすの日曜日は「母の日」ですね。だから、なにかお母さんに喜んでもらえるお手伝いをしてくださいね」というような意味のことを、幼児に話をした。そしてさらに、「で

はどんなことを、みなさんはお母さんにしてあげるでしょうかね」と聞いてみた。

幼児たちは、口々にいろんなことを保育者に話しかけてきたが、その中から、二、三人の幼児たちに、具体的なお手伝いの内容についての発言を求めたあと、その発言を是認するとともに、時間の関係上、他の幼児たちからの発言を求めることについては打ち切らざるをえなかったもので、さらに幼児たちに、「では、月曜日にね、先生は「母の日」に、お母さんに、どんなお手伝いをしてあげたか聞きますから、ひとりひとり先生に教えてくださいね」ということを約束して降園準備にかかることにした。

さて、この保育者は、毎年そうであるように、これですばらしい、いろいろな話が月曜日に聞けるだろうということを楽しみにして、ひとりひとりの幼児を送り出した。

月曜日の朝、この保育者は、幼児の反応に対して期待をもって、いそいそと保育室へ向かったそうである。そして朝の幼児との出会いの中で、ひとりひとりの幼児に、「きのうの母の日に、〇〇ちゃんは、お母さんにどんなことをしてあげたの？」というように聞いてみた。幼児たちは、「保育者の働きかけを受け入れて、喜々として、昨日あったことをいろいろと話してくれた。保育者は、自分の保育がうまくいったことに対して、きわめて満足

げであった。

(3)

ところが、しばらくして登園してきた男児のひとりは、同様の問いかけに対して、

“ぼく、なんにもしなかった”

と、不満げな顔つきで、きっぱりと、いともさりげなく答えた。

その保育者は、何かで不意に頭を打たれたような感じで、すぐにはなにも反応できず、ただ茫然として、しばらくはその幼児の顔をみつめていた。と同時に、これまでの自分の保育についての自信めいたものは、一瞬にして消失してしまうのを感じとったようである。

しかし、幼児の方は、保育者の感情の変化には無頓着で、いこう表情をかえるようすもなく保育者の方を見つめている。そこで、このままではと想って、勇気を出して、その幼児に、“○○ちゃん、なぜお母さんのお手伝いしなかったの？”と聞いてみた。

すると、その幼児は、相変らずきわめて無表情に、

“先生、ぼくの方見て話してくれななだ、ぼく、先生と約束しとらへんもん”

と答えた。

そこで、その保育者は、とっさに“ごめんなさい。先生が見なかつたの悪かつたわね”と喋ってしまった。もちろん、この保育者にとっては、幼児の感情をそのまま受容するような返事をするのがやつのことであつたといえるのである。

なお、この幼児との出会いをしている間にも、後から登園してくる幼児があつたので、それらの幼児との出会いのため、この幼児とのかかわり合いは、保育者の受容的な発言を最後にして打ち切らざるを得なかつたということである。

(4)

この保育者にとっては、「母の日」のお手伝いのことについての働きかけは、前述のような方法で、これまで毎年くり返してきたことであつた。しかし、これまでは、朝の幼児との出会いのときに、ひとりひとりの幼児と、そのことについて話し合つたことはなかつたのである。

おそらく、従来していたように、みんなが集まつてきた学級全体の活動のときに聞いたとしたら、ひとりひとりの幼児は、思い思いに保育者に働きかけるといふことになつたのであろうし、そのことで、全部の幼児が何かしたというように思いこんで満足し

ていたであろう。また、ときにはその中の数人の幼児に発言を求めたりして、それがあたかも全体の幼児のことであったように思ひこんで得意になっていたかもしれないのである。

だから、この保育者はひとりひとりの幼児との朝の出会いで話し合うことの意義の重要性を認めるとともに、これまでの自分の保育について、大いに反省したということである。

もちろん、このような事態の発生してきたことの背景には、入園後間もない五月のことであったという時期のことや、ひとりひとりの幼児の発達そのものの差異という個人的な問題もあろう。とくに、ここでとりあげた幼児は、一般的にみて、そのことが起こった時点では発達の遅れが目立っていた幼児であったということである。

(5)

いずれにしても、

“ぼく、なんにもしなかった”

“先生ぼくの方見て話してくれなんだで、ぼく、先生と約束しとらへんもん”

という幼児の発言は、そのようなことの起こった具体的な事態とは関係なく、保育者にとって今一度じっくりと思ひ出してみる

必要があるだろう。このことに関しては、私に話してくれた保育者と同じ意見であった。

いうまでもなく、学級全体の活動では、保育者が前向きに出て指導するということは、ある意味においてはきわめて当然のことであるが、しかし、ひとりひとりの幼児たちは、ひとりひとりが保育者との間に、なんらかのつながりを要求しているということも事実であろう。

だから、保育者は、全体の幼児に対して働きかけをしていると思っても、ひとりひとりの幼児は、保育者がそれぞれ自分だけに働きかけをしてきていると思っているということになる。それは、保育者の話しかけに対しても、また、保育者の視線の働きに対しても同様のことである。もっと端的に言えば、保育者のすべての行動が、ひとりひとりの幼児にとって、自分との関係においてのみとらえているということである。

もちろん、それは、学級全体の活動ばかりでなく、幼児がグループで活動しているときにでもやはりあてはまることであろう。

だから、保育者としては、このような幼児の受けとめ方を、もう一度反省してみたいと思うのである。そこに、幼児とともに生活する保育者の基本的な問題があらう。

(つづく)

(暁学園短期大学)